

よりよく生きようと、自己の生き方について考えを深める子どもの育成

小 学 校 石 崎 正 人

研究協力者 太田 佳光（愛媛大学）

1 主題設定の理由

前期研究において、〈自己効力感〉が高まっている姿を、「自分らしく、よりよく生きようとする姿」と捉え、研究を進めてきた。そうした姿が現れるためには、子ども自身が自分のこととして問題を捉え、「考えたい」「伝えたい」「いろいろな考えを聞いてみたい」と思えるよう指導していくことが大切であると確認できた。

道徳教育の要である道徳科の学習で養う資質・能力は、道徳性である。そのためには、多様な価値観に触れることが大切である。価値観とは、その人が持っている「様々なことに対する考え」と捉える。日頃生きていく上で私たちは、選択、判断を繰り返して生きている。例えば、満員の電車で座席にいた時に、重そうな荷物を抱えた高齢者が乗ってきたとする。どうしようか考えている時点では、声を掛けようか、黙ったままいようか、といった選択肢がある。その中で、重い荷物を持って大変そうだから、声を掛けて席を譲ろうとか、何も自分が声を掛けなくても他の誰かが席を譲るかもしれないから、しばらく様子を見ようなどと、考えを巡らせるであろう。そして、「席を譲ろう」「黙ったままでいよう」などと判断するわけだが、その判断には何かしらの根拠が存在する。「席を譲る」と判断した理由を尋ねると、「自分よりも相手の大変さを少しでも軽減したいから」と相手を思いやる気持ちからであったり、「電車は公共の乗り物だから、互いに助け合うことが大切だと思ったから」とみんなが使う場所でのマナーとして、気持ちを考えたからであったり、同じ選択をしても、そう判断した理由は人それぞれで、多様である。その根拠の中に、その人の価値観が表れている。授業を通して多様な価値観に触れるということは、行為の背景にある根拠にまで掘り下げていくことでいろいろな考えに触れるということである。それにより、自分一人では気付くことのできなかった考えに出合い、触発されてこれまでの自分の価値観について再考することができる。

その中で、自分がこれまで持っていた価値観について「間違っていなかったんだ」とより確かなものにしたたり、「自分はこれまで何気なくしていたことにはこんな意味があったんだ」ということに気付いたり、他者の意見を聞いて、考えが変わったりする。このような過程を経て、最初に自分が考えていたことについてもう一度よく考え、自分が納得できる考えを導き出す。

これが、私たちが道徳科において目指している「よりよく生きようと、自己の生き方について考えを深める」姿であると考えている。こうした授業を積み重ねていくことで、自己の生き方について考えを深める楽しさを味わい、よりよく生きていくために更に考えを深めたいと感じてほしい。そして、少し立ち止まってどうすればよいかを考えて行動することができる子どもを育てたいと考え、本主題を設定した。

2 道徳科における「子どもと創る『深い学び』」

(1) 子どもと共に学びをつなぐ道徳科の授業づくり

ア 道徳科における「深い学び」とは

私たちは、道徳科の学習を通して、子どもが「今日はみんなで話し合っ、いろいろな考えを知ることができた」「道徳科で学習したことをこれからの生活に生かしたい」といった「学習してよかった」という思いが持てるようにしたいと考えている。道徳科において「深い学び」について、以下のように捉える。

道徳的価値にかかわる問題について、自己を見詰め、他者との交流を通して、物事を多面的・多角的に考え、自己の生き方についての考えを深める学び

道徳科では、まず道徳的価値にかかわる問題に対して、子どもが「考えてみたい」「みんなで話してみたい」といった思いを持つことができるようにしていくことが、「深い学び」へと誘う第一歩である。教師の思いが強すぎて、子どもの思いとかけ離れた授業になってしまうと、私たちが目指す「深い学び」にはならない。「登場人物と似た経験があるから、気持ちが分かるな」「自分だったら、それはできないだろうな。この登場人物は、どうしてそんなことができたんだろう。みんなで考えてみたい。」といった、子どもの思いに寄り添いながら学習していくことで、子ども（自分）と学習材（教材、経験等）とがつながっていく。

そして、物事を多面的・多角的に考えるには他者とのかかわりが不可欠である。互いに考えを言い合うだけではなく、自分の考えと比較しながら対話していくことで、子どもと他者がつながっていく。

このような学びを経て、自分自身と向き合い、自分の考えに自信を持ったり、自分の持ち得ていない価値観に出合い、考えを新たにしたりしていくことが、自己の生き方について考えを深めることにつながる。そうした一連の学びを道徳科で目指す「深い学び」として捉え、研究を進めていく。

イ 子どもと共に学びをつなぐ道徳科の授業

私たちが目指している授業は、子どもが、「これってどういうことなの。みんなで話してみたい。」「私はこう思うけれど、みんなはどう考えるんだろう。」といった子どもの内から出てくる疑問や思いを大切に、子ども主体で学習を進めていくことである。そうした子どもの思いが高まるように、教師は意図的に発問をしたり、教材提示を工夫したりしながら、子どもの思いや考えの流れをくみ取り、子どもと学習材、他者、そして自分自身とがつながるようにする。つまり、教師の役割は、子どもと学習材や他者、自分自身とがつながるように橋渡しをするということである。では、子どもと学習材、他者、自分自身と学びをつなぐとはどういうことなのかを（図1）に示す。

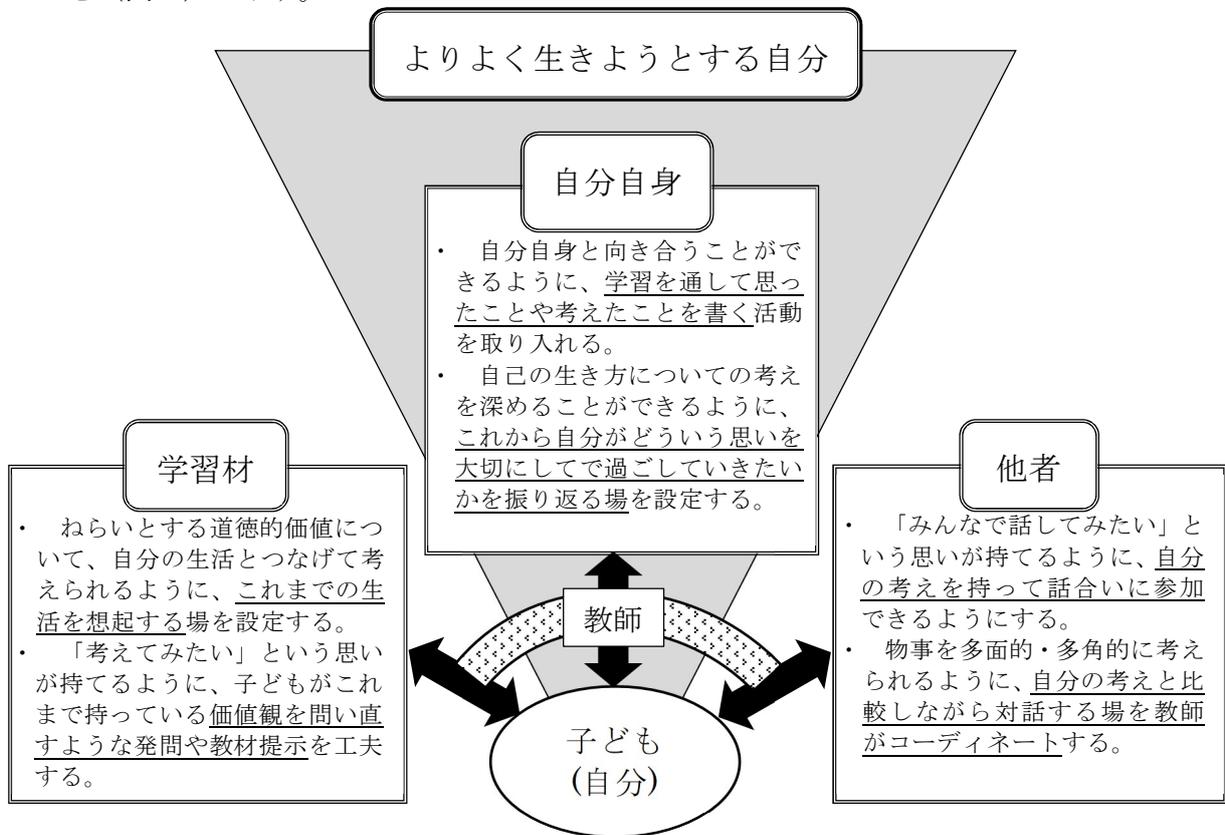


図1 子どもと共に学びをつなぐ道徳科の授業イメージ

(2) 子どもの学びをつなぐ指導の手立て

ア 学習材とつなぐ手立て

- ねらいとする内容項目と関連のある写真を提示したり、疑似体験をしたりして、自分の生活や考え方を想起しやすくする。
- 普段何気なくしていることについて、どうしてそうするのかを尋ね、これまで持っている価値観を問い直したり、自分の持っている価値観を確認したりする。
- 教材のポイントとなる言葉や挿絵を提示し、「その気持ち分かるな」「自分にも似た経験がある」といった思いを大切に、自分のこととして考えられるようにする。
- 事前に教材を読んで、子どもが授業でみんなと話し合いたい内容を考えておき、問題意識を持って学習に臨むことができるようにする。

道徳科における「見方・考え方を働かせる」ということについて、以下のように捉える。

様々な事象を、道徳的諸価値の理解をもとに、自己とのかかわりで多面的・多角的に捉え、自己の生き方について考察すること

ここで大切にしたいことは、ねらいとする内容項目について「自己とのかかわり」で考えられるようにすることである。そのために、ねらいとする内容項目に関連するこれまでの自分の生活を想起させることで、過去の自分自身を振り返り、自分と学習材がつながるようにする。また、事前に教材を読んでおき、みんなと話し合いたい内容を考えることで、主体的に学習に取り組むことができるようにする。

イ 他者とつなぐ手立て

- 小集団による話し合いを行い、どうしてそのように考えたのかを子ども同士で互いに聞き合う場を設け、自分の考えを確かなものにする。
- ファシリテーション・ツール（ホワイトボード、付箋紙、タブレット端末等）を活用して、自分の考えとの共通点や相違点を比較しやすくする。
- 全体の話し合いでは、教師が根拠を問うなど繰り返し発問を行い、行為の背景にある思いについて考えるようにする。
- 子どもから出てきた考えを教師が整理して提示し、どの考えが自分にとっても相手にとってもよりよいものかという視点で話し合うようにして、学級として大切にしたい考えをまとめる。
- 教師は、子どもたちの思考の流れに沿って授業に臨めるよう、ねらいとする道徳的価値について分析し、繰り返しや考えの整理等の話し合いのコーディネートに役立てる。

ここで大切にしたいことは、多様な価値観に触れることである。子どもが自分の考えを持つことができると、「他の人はどう考えているのだろう。」「自分の考えを他の人にも聞いてもらいたい。」といった思いを持つようになるだろう。そうした子ども自ら「話したい」「聞きたい」という思いを持って話し合いを行うことで、自分と他者がつながっていく。そのために、自分の考えを持つ時間を確保できるようにする。さらに、できるだけ多くの子どもが学習に参加できるように、小集団での話し合いを取り入れる。そのときに、子どもたち自身で話し合いが進められるよう、相手の考えを受け入れることや「どうして？」などと相手の考えについて深く尋ねることを確認した上で、ファシリテーション・ツールなどを用いて話し合いを進めていくようにする。

ウ 自分自身とつなぐ手立て

- 学級での話し合いを振り返って自分が納得できる考えを書く活動を取り入れ、自己を見詰める場を設ける。
- 学級でまとめた考えについては、板書と共に教室に掲示する。生活の中で、道徳科で学習してきたことが、役に立つことを実感できるようにする。
- これまで学習してきた道徳的価値について、サークル対話でじっくり話し合う場を設け、自己の生き方についての考えを深められるようにする。

ここで大切にしたいことは、「自分はこんな考え方をするんだな」「〇〇さんの考えを聞いて、なるほどと思った。自分も真似したい。」といった自己の生き方についての考えを深めることであ

る。そのために、学習を通してどんなことが分かったか、どんなことを考えたのか、これからどのようにしていきたいかといったことをワークシートに書くようにする。書くことによって学習したことについてじっくりと向き合いながら、ちょっと先の未来の自分自身を想像し、よりよく生きていこうという前向きな気持ちを持てるようにする。

(3) 「子どもと創る『深い学び』」における評価

ア 評価の視点

「深い学び」が実現できたとき、次のような子どもの姿が表れると考える。

- 自分のこれまでの経験と重ねながら、問題について考えようとしている。
- 多様な価値観に触れ、自分の考えに自信を持ったり、自分が持ち得ていない価値観に出合ったりして、考えを広げ深めようとしている。
- 自己を見詰め、これから自分がどういう心持ちで過ごしていきたいかを考えようとしている。

こうした姿が表れているか、指導者評価と子どもの自己評価の二つの側面から見取っていく。指導者評価として、空間軸（ワークシート、ファシリテーション・ツール、発言）をつなげ、子どもの思考の深まりを見取るようにする。時間軸（授業後、学期末）をつなげ、子どもの考え方の変容や成長の様子を見取るようにする。子どもの自己評価として、学習を通して考えたことを自分の生活にどうつなげたいかや、学習に対する取り組み方はどうであったかを評価するようになる。その際に、教師はどのような視点で見取り、子どもは何を自己評価するのか（図2）に示す。

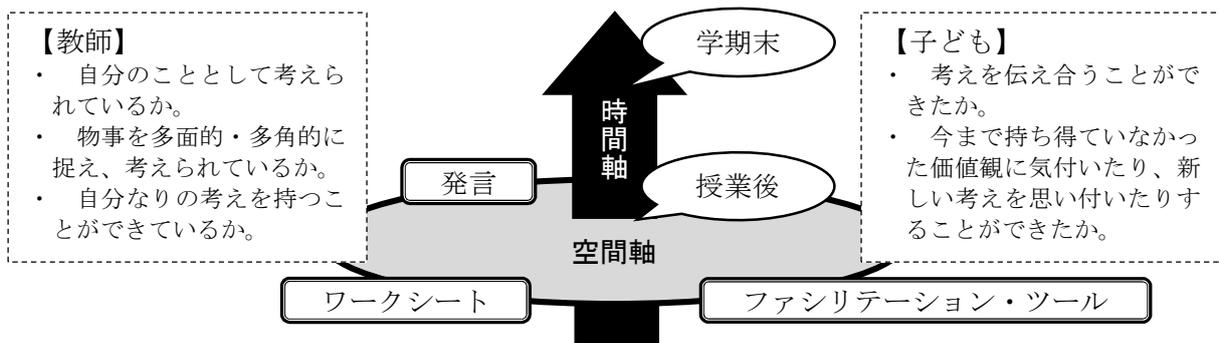


図2 評価の視点

イ 評価の具体的な手立て

(ア) 空間軸から見た手立て

「深い学び」に達したかどうか、ワークシート等の記述を中心に見取る。記述の際には、学級で話し合ったことやこれまでの自分の経験と重ねて考えたこと、「自分っていいところあるな」と感じた瞬間、自分が考えていたことは他の人から見たら違うように感じるということが分かって驚いたこと、他の人の考えを聞いて、「その考えはいいね」と考えが変わったことを書くように伝える。必要に応じて、よいものを取り上げ、全体にフィードバックしていくことで、どの子どもも自分自身とつなげて考えられるようにする。

(イ) 時間軸から見た手立て

学期ごとに、書いてきたものを読み返したり、掲示してある学級でまとまった考えを見たりして、これまでの授業を振り返る。そして、印象に残っているものはどれか、その時の自分と今の自分を比較して、考え方に変化があったかなどを振り返るようにする。

(ウ) 子どもが自己評価をする際の手立て

自分の学び方について、ワークシートに、考えを伝え合うことができたか、自分の考えを深めることができたかなどを振り返る項目を設け、点数化する。学習してよかった度を設け、なぜその点数にしたのか理由を簡潔に書くようにする。また、互いの学び方がどうであったかを振り返る相互評価をする場を設け、「〇〇さんの考えを聞いて、考えが深まった」など共有していくことで、次回以降の学習への更なる意欲付けを図りたい。

(石崎 正人)